ないしょ話

志賀　貢

毎日新聞社

続 医者のないしょ話

昭和五十五年二月二十日 第一刷
昭和五十五年三月十五日 第二刷

著者 志賀 貢

編集人 高杉 治男

発行人 牧内 節男

発行所 毎日新聞社
〒100 東京都千代田区一ツ橋／〒530 大阪市北区堂島／〒802 北九州市小倉北区紺屋町／〒450 名古屋市中村区名駅

印刷 図書印刷
製本 正文社

定価 八八〇円

©志賀 貢 1980

続 医者のないしょ話

目次

アメリカ橋　七
幽霊手当　四
テスト飛行　二三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ステレオ娘　二五
名ランナー　一九一
ショート・ショート　三七

装幀・イラスト　七崎　ゆき

続 医者のないしょ話

アメリカ橋

1

君が影うつして流るる隅田川
大川とよびて幾年歳ぞすぎ

「奥さんの歌ですか」

私がのぞきこむと、若奥さんは歌集をそっととじた。

「いや、続けて下さいよ。ちょっと様子をみに来ただけなんですから」

私はかなり大袈裟な手ぶりでそう言ったのだが、奥さんはあわてて椅子から立ち上がると、ベッド脇をあけた。まだ二十四、五だろうか、その立ち居は機敏である。だが、どことなく横顔のあたりにやつれた影がさしていた。

（この血色のよい男が、ほんとうにあと数ヵ月で死んでゆくのか）

医者の私にも信じられぬ、患者の寝顔だった。

「よく眠っているようですね」

「……」

奥さんは、小さく首をふってうなずいた。

「夜は痛がりますか」

「いいえ」

「そう、それで血色がいいんだな」

奥さんの右頬にえくぼができた。ほとんど化粧らしい化粧もしていないようだが、とても清楚できれいだ。

「看病も、疲れるでしょう」

それには答えず、奥さんは毛布に手をかけると、夫の首のあたりにひいた。

「付き添いは、奥さん一人で」

「はい」

口数の少ない女だが、それだけに芯は強そうにみえる。奥さんにだけは、本当の事を伝えてある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「ザルコーマ（肉腫）」
あの時の奥さんの表情……俺はなぜ医者になんかなったのだとつらい思いをしたものだ。泣くでもなく、とり乱すでもなく、奥さんはちょっと首をかしげて、ただジッと私の目をみつめていた。
「その病気は治るのでしょうか」
と聞いているような目にもみえたし、
「先生、治していただけるのでしょうね」
と、まるで詰問しているような目にも、私にはみえた。
（治る、ご主人はきっと治る）
私には、どうしてもこのウソがつけなかった。あの時以来、奥さんはますます無口になった。回診の時も、ただ黙って頭をたれて、私の説明を一方的に聞いているだけだ。おそ

らく、奥さんはすでに夫の病気のことを全部知っているに違いない。本の好きな人らしいから、あるいは自分で調べたかもしれぬ。

「肉腫……あなたの手には負えぬ病」

私のひがみのせいか、時々奥さんの目がそう訴えているような気がしてならないのだ。

立木晴夫……二十九歳、商事会社経理

私がはじめてこの若夫婦と出合ったのは、四カ月ほど前だった。

「風邪をひいたらしくて、セキがどうも止まらないんです」

ゴホン、ゴホン、患者は診療室でも何度かセキこんだ。

（いやな咳をするな）

内科医の私には、それが風邪の咳とはちょっと違うことが、すぐにわかった。

空咳……血痰……胸痛……肺癌？

「レントゲンをとってみましょう」

患者は、風邪位でレントゲンをとるんですかと、一瞬いぶかしそうな顔をしたが、奥さんにうながされるようにして診察室を出て、レントゲン室へむかったのだった。

「先生、血沈がこんなにすすむのですが……」

外来の谷看護婦が、顔を曇らせた。

「三〇分でどれ位？」

「いいえ、まだそんなにたっていません。でも、もう三〇ミリ以上です」

（やっぱり、そうか）

私は、レントゲン技師見習の林君に、患者のフィルムを速現するように、伝えさせた。

こんな時は、医者もやりきれない気持になる。まだ医者になりたての頃は、患者を診て病気をあてたうれしさが先に立って、思わず得意満面の表情になったものだ。

だが、近頃は、私は随分と変わったようだ。直感だけは、まるで磨ぎすまされた刃物のように、年々するどくなってゆくような気がするが、不治の病を発見した時の憂鬱さといったら、たとえようがないほどだ。俺も年で、勇気がなくなったということなのだろうか、とも思う。

「先生、これでよろしいですか」

林君が、出来上がったフィルムをはだかのまま持ってきた。谷看護婦が、

「パチパチ」

と、手早くシャーカステンのスイッチを入れた。明るい白色の光のなかに、患者の胸部がくっきりと浮かび上がってみえる。

（アッ）

私は、出そうになった声をごくりと飲みこんでいた。待合室には、患者と奥さんが待っている。おそらく判決をうける被告みたいな気分だろう。びりびりと神経をとがらせて、廊下を行きかう看護婦や技師たちの一挙一動をみつめているに違いないのだ。まして、レントゲン室の林君が、はだかのまま患者のフィルムを診察室に持ちこんだばかりである。耳をすませて、きっと診察室の音を気にしているはずだ……そう思うと、いよいよ私の気は重くなったのだったが、

「谷さん、患者さんをもう一度呼んでくれないか」

と指示した。

肺野に数個所、まるで牡丹雪のような大きさの白い影がみえる。

(肺炎の影?……いや違う)

(結核?……違う、違う)

(癌?……まさかこの若さで)

(胸膜の病気か?……いやいや)

(心臓か?……さてと)

私の頭のなかで、病気のファイルが音を立ててめくられていった。

「わからぬ」

患者をもう一度呼んだのは、実は、自分でもよくつかめぬ病をあえて患者に説明しようとするためではなかった。空咳が続く、血沈が異常に亢進する、胸に白い影がある、ともかく、

（もう一度、患者の体を診たい）

そう思ったのである。

「肺に炎症を起こしているようですね」

「風邪じゃないんですか」

患者の立木晴夫は、意外だという顔をしたが、奥さんの目は、

「やっぱり」

と、私に同意したようだった。

「いや、風邪をこじらせただけかもしれませんけれど、肺に肺炎のような影があるんです。もう一度、上着を脱いでみて下さい」

とたんに、患者は嫌な顔をした。無理もないと思う。医者の都合で、裸にさせられたり、着せられたり、

『俺は着せ換え人形じゃないんだぞ』

その通りだ。でも、もう一度裸になってほしいのだ。あなたのためでもあるし、医者の

私のためでもある。私は、ジッと彼が上着を脱ぐのを待った。
「あなた、先生のおっしゃる通りにして」
不機嫌な夫を、奥さんが急き立てた。
「はい、大きく息を吸って」
私が打聴診をはじめると、立木晴夫は不服そうに口を一文字にしながらも、応じてくれた。
「はい、こんどは背中をみせて下さい」
回転椅子が、半回転して、患者が背をみせた瞬間、
（オヤッ）
私の視線は、背中のずっと下の方で、停止した。
（なんだろう？　脂肪のかたまり？　それとも粉瘤？　いや違う）
最初の診察では、胸ばかりに気をとられていたが、こんどは、ズボンのベルトのあたりでみえかくれしている、「小さなコブ」に気付いたのであった。
「グリッ、グリッ」
普通のコブのようでもあるが、感触が不気味だ。なにより気になるのは、コブが下の組織とゆ着して動きがにぶいことだ。脂肪のかたまりなどでは、指でつまみ上げて左右に引

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.